

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

解放

【所属】(助成決定時)

東京外国語大学

【研究題目】

日本における「引揚げ文学」と満洲亡命文学との比較研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、「引揚げ文学」と、満洲亡命文学との関連性を明らかにすることを目的とする。「引揚げ文学」とは、「引揚げ作家」が、植民地・占領地からの帰還と言った集合的体験をもとに描いた文学作品のことを指す。しかし、こうした「引揚げ文学」は、必ずしも引揚げ作家自身の引揚げ体験のみで構築されているとは言い難い。例えば、満洲から引揚げた作家が書いた「引揚げ文学」には、満洲から亡命する作家が描いた作品、即ち、満洲亡命文学の面影が見られる。満洲亡命文学とは、故郷の満洲が日本の植民地になった故、政治的理由などで、満洲から亡命する作家が書いた文学作品のことである。

本研究では、日本近代文学の「引揚げ文学」と、満洲亡命文学との関連性を実証することによって、日本近代文学と中国近代文学との新しい接点を検証したい。こうした検証を通して、帝国崩壊後の東アジア文学の空白を埋め、東アジア文学研究全般に貢献することを目的とする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、引揚げ作家の代表者・安部公房が過去の引揚げ体験をもとに書いた『けものたちは故郷をめざす』を対象に、主人公における植民者＝抑圧者の視線を分析することによって、引揚げ者とは根本的には植民者であるために、抑圧者としての側面を持っていることを明らかにした。小説の中で、安部は自らの引揚げ体験や植民地体験が象徴する植民者の「記憶」を再構築したが、その「記憶」の中には、満洲亡命作家の「記憶」も混同されている。満洲亡命作家に、地理的故郷を離れて祖国に逃亡する者が多いという点は、植民地を故郷とする引揚げ者が祖国へ引揚げるといふ行為との共通点を見出すことができる。

本研究では、安部の『けものたちは故郷をめざす』と、満洲亡命作家・蕭軍の作品『同行者』、『羊』とを比較することで、両者の関連性を明らかにした。

『同行者』で描かれている登場人物の移動には、目的地を見失ってしまう点で、『けものたちは故郷をめざす』で描かれている目的地の日本が次第に曖昧化していく移動との共通点が指摘できる。しかし、同じ満洲を舞台にしているが、『同行者』では、満洲は癒しの空間として描かれているのに対して、『けものたちは故郷をめざす』では、満洲は「死」のイメージを持つ恐怖の空間として描かれている。こうした異なる描写は、引揚げ者である安部の抑圧者としての属性と、亡命者である蕭軍の被抑圧者としての属性との差異に由来すると考えられる。

『羊』と『けものたちは故郷をめざす』は、その故郷意識の喚起の仕方と、作品の最終場面の描写が類似している。ただし、『羊』の語り手が被抑圧者の立場から語っていることが、蕭軍の亡命者という抑圧される存在を意味している一方で、『けものたちは故郷をめざす』における久三の語り手は、久三の抑圧者としての属性を裏付け、引揚げ者である安部の抑圧者としてのアイデンティティを表象しているとの結論に至る。

【結論・考察】（４００字程度）

アメリカの研究機関での調査によれば、敗戦後の日本はGHQに支配統治されたために、満洲亡命文学は満洲国関係資料の一部として、GHQが接收し、引揚げ作家が参照した満洲亡命文学の初出版の多くは、依然とアメリカの研究機関に保管されている。そして、1930年代後半から左翼文学として日本に紹介された満洲亡命文学、とりわけ、満洲亡命作家の代表者、蕭軍(1907～1988)、蕭紅(1911～1942)、梅娘(1916～2013)の作品は安部公房を始め、多くの引揚げ作家に示唆を与えたのである。

本研究では、安部公房の『けものたちは故郷をめざす』と、蕭軍の『同行者』と『羊』との関連性を具体的に比較検討することによって、引揚げ文学は引揚げ作家の実体験のみが投影されているのではなく、満洲亡命作家の経歴を含む多層的な実体験が、それぞれの作品に投影されているということを明らかにした。